町田市　子どもセンターまあち

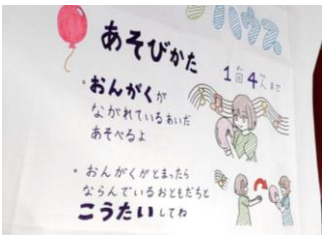
中高生による子ども発達センターへの出張事業

取組の背景・目的

●町田市の子どもセンターでは、利用者である子どもたちが、主体的にルールづくりやイベントの企画・準備・運営などについて考え、活動する、子ども委員会をそれぞれの館で設置している。
●子ども発達センターから「子どもと保護者が地域の中でさまざまな人と触れ合う」ことを目的に、子ども委員会と交流できないかという相談があったため、メンバーの中高生と検討し、実施することになった。
●子どもセンターまあちの目的として、子ども委員の中高生が、支援の必要な子どもたちと関われるきっかけとした。また、事業への取り組み方を、企画から実施までを通して学ぶことで、中高生の「やりたいこと」を「目的を達成するための参画」に昇華できるようにサポートする。
●市直営の「子どもに関する施設」同士が連携することによって、新しい取り組みや、事業の幅を広げるきっかけとする。

取組の概要

●内容　「子ども発達センター夏祭り」ブース出展の企画
●日時　２０２２年７月９日１０時から１２時
　　準備期間６月頃から１ヵ月程度
●場所　準備・検討　子どもセンターまあち子ども委員会活動室「まちがや」
　　実施場所　子ども発達センター（町田市直営）
　　…０～１８歳未満までの障がいのある子どもや発達に遅れや不安のある子どもを対象に専門的な助言や療育を行う施設。
●体制　子ども委員中高生メンバー（１１名）、担当職員（常勤１名、非常勤１名）
　　※当日、及び当日までの指導や相談役として子ども発達センター職員３名が参加。



●実施内容
　・工作コーナー「キラキラペットボトル」
　・視覚体験コーナー「手作りプラネタリウム」
　・感覚体験コーナー「バルーンハウス」
●基本的に、実施に向けての調整や、準備の流れ、集まる日にちなどは中高生が自分たちで検討できるようにすることで、自主的な活動を促した。職員はメンバーからの相談を受けたり、必要物品の準備、施設間で必要な調整を中心に行うことで子ども達の活動をサポートした。
●消耗品、備品等　中高生がカタログ等で必要なものを選び、職員に必要性を説明した上で、施設として購入した。すべてを購入するのではなく代用品などの提示などもしながら用意をした。
●相談役として子ども委員会のＯＢ・ＯＧが一緒に参加し、サポートをした。

工夫点・留意点

●子ども発達センター職員の協力のもと、子ども委員が、福祉に関する理解を深め、併せて事業の検討をするための流れを学べるよう、以下のような進め方を行った。
①学ぶ機会…子ども発達センター職員から、どのような子どもたちが通っているのか、療育とは何か、留意すべき点について中高生との交流を深めながら教える。
②自分たちで検討…中高生が学んだことを踏まえて、企画内容を検討する。複数の案を企画書にまとめる。
③子ども発達センター職員へのプレゼン…企画案を説明し、実施内容を決定する。足りない部分や留意点などをアドバイスしてもらうことで修正をした（例えば、小さいものをうまく持てない子がいるのでスプーンを使う。次の工程がわかりやすいように写真を撮って掲示するなど）。
④フィードバック・準備…プレゼンでのアドバイスを踏まえて、準備を整えていく。
⑤実施・振り返り…実際やってみて感じたことや成果を、発達センター職員に伝える機会を作り、報告するとともに、コメントをもらった。

試作・検討の様子

プレゼンの様子

取組の効果

●支援が必要な子ども達に関わったことで、中高生の中のイメージが変わった。もっと関わる機会がほしいといった声も上がった。また、このイベント以降も、年齢や障がいに問わず、様々な子に関わってみたいとの感想も上がった。
●子ども発達センターの職員からも、中高生の様子や子どもに対する関わり方を知れてよかった。加えて、中高生ならではの新しい視点での支援方法や、配慮について職員としても学ぶ機会になり、今後の療育に生かしたいとの話があった。
●中高生メンバーでイベントの企画を考えるときに、自分のやりたいことだけではなく、参加者の視点に立ち、より誰もが、楽しめるものを考えられる視点に変化した。

課題・今後の展開

●夏イベント終了後に、中高生から子ども発達センターにまたやりたいとのアピールをしたことで、再度出展の依頼があり、今後の地域と連携した子ども達の活動につながった。
●今回の経験を生かして、年齢や個性、障がいなどが関係なく、誰もが参加できるようなイベントを、子ども委員会主催で企画し、幅広い子どもたちの交流ができるようにする機会を作っていく。
●イベントを企画する上での楽しい参加方法や、対象や場所などに応じた検討ができるようになったため、館の運営やイベントの実施につなげていきたい。
●子ども委員会のメンバーだけでなく、他の子ども達にも活動に興味を持てるような取り組みをする必要がある。
●他の施設とも協働できる場を作ることで、中高生の参加できる機会を増やしていく。